

# 落合賢

「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア 2009」で、僕の短編映画「ハーフェニス」(08)がジャパン部門の優秀賞と東京都知事賞をいただきました。第二次世界大戦中の日系人強制収容所を舞台にした物語なんですが、もともとクリス・タシマさんが監督された、一九九七年のアカデミー賞短編賞受賞作「ピザと美德」を見て、外国で生きる日本人の歴史に興味を持つようになりまして。それから縁あって、まさに戦時中の日系人強制収容所を扱った、クリスさんの『デイ・オブ・インディペンデンス』(03)の撮影に一日だけお手伝いとして参加させてもらったんです。その後、今度は僕自身がAFI(アメリカ映画協会付属大学院)の卒業制作の監督作を準備していたときに、プロデューサーの兼原麻弥から、日系人強制収容所を題材にやらないかと持ちかけられました。それからリサーチとインタビューを重ねていく中で、日本の高校を卒業後、ハリウッドで映画をつくる夢を抱いて単身渡米した自分と、約三十年前に希望を持ってアメリカに渡った日系人の方がたの心情に重なるものを感じようになりました。

どうしても日本の大学でやりたいことが見つからなくて、「やっぱり自分は大好きな映画をアメリカでつくりたい」と、そのときに決意しました。それでわざと第二次内部試験にも行かず(笑)、親の反対を押し切って渡米することにしました。そのとき親に言われたのが、どうせならUSC(南カリフォルニア大学)やNYU(ニューヨーク大学)、コロラド大学といった有名校の大学院まで卒業しないと教育費を出さないということでした。親にしてみれば映画監督なんてヤクザな商売だから、いざとなったら大学の講師でも食っていけるようにとの老婆心が働いたみたいです。結局、NYUの映画製作学科のサマースクールに入り、同時に授業料が安いというところでサンタモニカの短大で一般教養を修得しつつ、一般教養修了後にUSC映画学科に編入。大学院はAFIに進みました。

最初の映画への目覚めは、小学生のときに、友だちと三人で渋谷駅前の映画館で見た、ステイヴン・スピルバーグ監督の「ジュラシック・パーク」(93)でした。あの興奮と感動は一生忘れられません。それで十二歳のときには、もう自分で映画を撮っていました。だから二十六歳にして、監督歴は一応十四年(笑)。それ以来、日常的にカメラをまわしてきましたから、映画をつくるということは、僕にとって呼吸をするのと同じようなもので、まるで息を吸ってはくように、アイデアを吸っては映画として出すという生活がずっと続いています。だから、背丈を測って柱につけた傷みたいに、自分の成長の痕跡として映画が残っているんです。

品しました。その中のひとつ、二〇〇八年に開催された「Pictures Battle x Show Biz Japan」という短編映画祭で、審査員長を務められていた井筒和幸監督に、「なぜお前は日本人なのに、日本語で映画を撮らないんだ」と言われました。理由は、映画を通して不特定多数の人とコミュニケーションしたいからです。しかも自分の映画の根底に流れるものとして、「世界平和」というテーマが一貫してあるんです。英語でつくることで、世界中に発信できる可能性が一気に広がる。ハリウッドで活動するならば、「日本人監督」ではなく、ただの「監督」として勝負したいという気持ちがあるんです。

NYUに入学して、まずニューヨークに住んだんですが、当時は英語がまったく話せず、友だちもなかなかできませんでした。けど学校の課題をこなすには、一緒に映画をつくるグループを信頼できるメンバーと組まないといけないんです。それで、中学校・高校とやってきたバスケの経験を活かし、大学のジムでバスケをやり始め、それを通して友だちが増えていきました。改めてコミュニケーションの大切さに気づいたのと同時に、映画こそが僕にとって、もつとも自然なコミュニケーションの手段なんだと再認識しました。

次に入学したUSCは、ものすごくハリウッドスタイルを意識した学校でした。そこで仲間やライバルたちとしのぎを削っているうちに、自己満足としての映画づくりからどんどん脱却していったような気がします。

USCでは、卒業制作は学年で四人しか監督できないんですが、僕は幸運にも監督に選ばれました。なぜ僕が選ばれたのかはわかりませんが、たいてい僕は、たとえ監督に選ばれてなくてもこの作品を完成させようと思っていました。それだけの気概がありました。そこで撮った「エクспレス831」(06)が審査会で評価され、いくつか映画祭にも出



「ハーフェニス」(08)  
監督・脚本=落合賢  
1943年カリフォルニア州マンザナー強制収容所。日本人の父とアメリカ人の母を持つ日系アメリカ人の兄弟ケンとジョー。父を亡くした兄弟は強制収容所を脱走し、わが家でひとり家族の帰りを待っているであろう母に会うために旅に出る。監督自身が経験した家族愛と離散、みずからの原点に戻ることと新たな出発などさまざまなテーマが込められている。「僕の作品のテーマである『世界平和』は、世界中にある“家族”という小さな幸福を大切にしようという小さな努力の積み重ねだけに尽きる。そういう小さな努力の積み重ねだけが次につながると思っています。」  
7月1日(水)より、プリリアショートショートシアター(横浜)にて公開

© KEN OCHIAI

落合賢(おちあい・けん)  
映画監督・脚本家  
1983年東京都生まれ。中学1年生で文化祭の出し物としてクラスメイトらと「僕らと三人の強盗達」(96)を自主制作して以来、映画を撮り続ける。青山学院高等部を卒業後、単身渡米。ニューヨーク大学映像学部サマースクール、サンタモニカカレッジを修了後、南カリフォルニア大学映画学科に、80倍の難関を突破し合格。卒業制作として撮った短編「エクспレス831」(06)が、同大学の審査会「ファーストブック」にて大学部門で1位、大学院を含めた部門で3位を獲得。続いて、アメリカ政府がアメリカ映画協会と共同で映画作家の育成を目的に設立し、大学院の映画学部としては世界最高峰といわれるAFI(アメリカ映画協会付属大学院)に、弱冠23歳で、日本人留学生として初めて監督学科に合格する。監督学科28人中、卒業制作を2本監督できるわずか2名のうちの1人に選ばれ、「ラッキーロータス」(07)、「ハーフェニス」(08)を監督。「ハーフェニス」は、「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア 2009」のオフィシャルコンペティションでジャパン部門の優秀賞と東京都知事賞を受賞した。現在はロサンゼルスを拠点に、ミュージックビデオ、ケイタイの動画コンテンツの短編映画などを手がけながら、長編映画の脚本を2本執筆中。